

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(四)『〔宝物集〕』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2008
Jtitle	三田國文 No.48 (2008. 12) ,p.25- 41
JaLC DOI	10.14991/002.20081200-0025
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20081200-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介(四) 『宝物集』 翻刻・略解題

恋田 知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『宝物集』を紹介する。本書については、外題・内題ともに記されておらず、奥書なども有していない。これまで述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間(一五九六—一六二四)の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される¹⁾。

本書は、『宝物集』二巻本系統の一伝本であるが、前半および末尾を欠くものであり、文意の通らない欠落部分なども多く認められる端本である。しかも、綴じる際に生じたとおぼしき錯簡も多く認められる。特異な伝本としては位置づけられないものの、さまざまな宗派の仮名法語が一括される「道書類」のなかに、本書が含まれているという点については注意を払うべきであろう。書誌については、以下のとおりである。

- ・ 函架番号 近ト一七二一レ
- ・ 形態 写本。一冊。仮綴。
- ・ 寸法 縦二八・二糎。横二一・五糎。

・ 表紙 なし。
・ 料紙 楮紙。
・ 丁数 三十七丁。
・ 本文 半葉十行。漢字平仮名交じり。字高約二三糎。
・ 内題 なし。
・ 奥書 なし。
・ 印記 一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。

翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打つなど、読解の便宜をはかった。なお、錯簡については本来の位置に改め、頁数下の()内に現行の頁数を記し、欠落と判断される箇所には、【欠】と付した。また、虫損については□を付した。

注

(一) 陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子—真盛上人伝関連新出資料をめぐって—」(『唱導文学研究』第六集 三弥井書店 二〇〇八年)、拙稿「説法・法談のヲコ絵—幻中草打画」の諸本—(『仏と女の室町—物語草子論—』笠間書院 二〇〇八年)、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子—「恋塚物語」をめぐって—」(徳田和夫氏編

『お伽草子 百花繚乱』笠間書院 二〇〇八年）を参照されたい。

【附記】

本書の閲覧ならびに翻刻の御許可を賜った、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げます。また、本書の翻刻・考察に際して、御教示賜った、陽明文庫文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げます。

なお、本稿は科学研究費補助金（二〇八二〇〇四六）による研究成果の一部である。

【翻刻】

第一に、道心をおこして、出家とんせいで仏になるへしと申は、これたしかのしゆきやう也。万法は心のなす所にて、さらにへちの法なし。ほつしんをおこしてしやうとをもとむへきなり。ゑいくわん法師は、人木石にあらず、このめはをのつから^{ほつしんすし}も^{はつしんすし}に^{はつしんすし}木をしへける。道心をおこさん物はよきともにしたしむへきなり。せんたんの林にいる人はころもをのつからかうはしく、あさの中のよもきはためさるになをきなり。うみにうかむ舟は万里を過、松によるかつらは千尺の木すゑにのほる。されは、せうれんけせかいの鳥はめうほうを

「1オ(1オ)

さえつれり。このゆへに、道心あらむ人にちかつきて、仏たうをねかふへし。法花きやうには、不親近^{ふしんじん}諸^{しよ}外^{がい}道^{だう}覚^{かく}志^しとのへ給へり。この心は、かりそめにもあしき友にちかつく事なかれ。よき人にしたしめとなり。心は第一のあたなり。心はこゝろをゆるすへからず。煩惱は家

のいぬうてともかとをさらす。心は山のかせきなつけどもしたかはす。心はあらかむまのことし。しつめて道心をこすへし。一ねんほたい心をおこせは、百千万の塔をつくるにはすぐれたりと申ぬれば、一ねんのくとくさへむりやうなり。いはんやなかく道心をおこして

「1ウ(1ウ)

ひとへに仏たうをもとめんにおいてをや。されは、しやか如らいけこんきやうの中におほくのたとへをとりてほたいしんのくとくをとき給へり。たとへは、せんけんやくわう^はゆ^はは^は一さいのやまひをとゝむるかごとく、ほたいしんも一切のほんなうのやまひをとゝむ。たとへは、むま、うし、ひつしのちのなかへしゝのちをいるれば、むま、うし、ひつしのうはきえうせぬ。又一切のたからの中には如意珠すぐれたり。一さいのくとくの中には、ほたいしんのくとくすぐれたりとのへ給へり。又ひみつさうきやうには、はしめのほたいしんより

「2オ(2オ)

重々の十あくをのそく。いはんや、第二第三第四においてをや。されは、せんさいとう子のほたいしんをおこしたまひしをは、みろく大しは獅子の座よりおりさせ給ひて、光明をはなちておかみ給へるなり。これとうしのたつときにあらず。ほたいしんのたつときなり。しかりといへとも、とめる人はたのしみにふけりて、しゆつの心さしなし。誰もせんには物うく、あくにはすゝみやすき物なり。しかれ共、

尺迎女らしいは、まかたこくの御あるし、しやうほん大王

のわう子にておはしましては十せんものくらゐにそな」2ウ(2ウ)

はりたまひて、ゑいくわにほこり、大しん百くわんに

いねうせられ給へきに、しやうしむしやうのはかなき

ことをなげき給ひて、わうゐをすてたまふのみ

ならず、おやにもつまにもわかれたまひて、たゝ

ひとりたんとくせんに入給ひ、十九しゆつけし給て、

十二ねんのあいた、なんきやうくきやうのこうつもりて、

十二月八日のあかつき、みやうしやうをみたまひ、しよ

ほうしつさうのことほりをさとりたまひてより

後、三かいのしゆしやうのたうしとなり給へるなり。されは、

大こくのあるしとなり給ひたらんは、夢まほろし」3オ(3オ)

のあいたのたのしみなるへし。三せれうたつの

ほとけとなりたまひて、なかくしやうしのくるしみ

をはなれ、けらくふたいの地にさし給こそ有かた

けれ。こゝをもつて、ちよくせのわれらをおもふに、

なにゝ心をとゝむへき。はやく物うきせいろのいと

なみをふりすてゝ、こせうせつしよのいとなみをなし

たまふへきなり。人のいのちのあたることは、あし

たの露のことく、よひのいなつまににたり。をくれさき

たつあいたこそあれ。つゐにはたれかのこりとゝ

まるへき。されは、女人なれとも、小野ゝこ町は生死

「3ウ(3ウ)

又かものなりすけかよめる。たれとともとまりはつ

へき身ならねとまつはさきたつ人そかなしき

藤わらのちかもりかよめる。けふまてはよそに

のみきくはかなさのいつの身の上にならむとすらん

露のいのちのきえぬまに、あるいはきやくしゆのせん

をまふけ、あるいはめのまへのくとくをつくるへき也。

一この夢さめて、のちのついでせんの物を七ふんかひ

とつをうくるとそ申ぬる。ほとけをしへてのたまはく、

たとへはわうくうにいけあり。此いけに色かたへなる

はちすさけり。ある人このはちすをぬすまんと

思ふ。もし人とかめは、をしもなくまねをよくすれば、

をしそと心えてとかめしとおもひてぬすむ程に、

花はかりに心入て、人のくるをほしらすして、とらへ

られてのちに、をしもなくまねをしければ、かひも

なくていましめられけり。そのやうに露の身のきえて

のち、くとくをなすはとらへられてのち、をしもなくまね

をしたるかとし。されは、かしこき人は十せんもの

くらゐをたにもすてゝめいとをそれぞれ給ためし、これおほし。

天ちくのごくわうしゆつけし給てのち、おほきに

たのしみ給ふを大しんあやしみて、といたてまつり

ければ、十せんものくらゐをたもちし時は、一さいに

つゐてそのおそれありき。しゆつけして後におそ

るゝ事もなく、たのしきよしをそ申^{の給}ける。されは、

「4ウ(6ウ)

かやうの人のおほきことは、かそへつくすにをよはす。
ほとけもがせうしゆつけとくあのくたらとそ仰られ
ける。この心は、われとしのわかりの時、しゆけして仏に
なる事をえたりとの給へるなり。されは、わかて
しゆけてたかるへき也。むかし七度けんそくしたり

「5オ(4オ)

し物のさいこうをもきかゆへに、大地こくにをちしとき、
さいにんかいはく、我すてに七度けんそくしたるつみに
よりてちこくにおつ。さて、七たひしゆつけしたりし
くとくはいかにかといひければ、ゑんまわう、たな心を
あはせてらひしたまひて、あくたうをまぬかれけり。
いはんやたうしんをおこしてしゆつけしたるくとく、これ
にておもひやり給ふへきなり。はやく道心をおこし
て、とく仏になり給ふへきなり。第二に、ふかく三
ほうをしんしてほとけになるへしと申は、しよ仏はみな
三ほうをしんして、たうをえ給へるゆへなり。三ほうと

「5ウ(4ウ)

申は、ふつほうそうの三つなり。ほとけに
たのみをかけたてまつりて、しやうふつすへき
むねをおろく申すへし。法花きやうこんし
三がいかにせがうごちうしゆしやうしつせごしと
のへ給ふなり。このもんの心は、三かいのしゆしやうはみな
我子なりととき給へは、ちゝのこことくにおもひたてまつ
りて一さいのしゆしやうたのみをかけたてまつらは、うたかい
なくほとけになり給へきなり。又ひゆきやうをとき

給ひしときは、七日のあいたしやれんしひの御まなこより
くれなるの御なみたをなかし給ひて、まつたいの「6オ(5オ)
しゆしやうの道心なきことをそかなしみ給ひし
こんしやうのおやはたゝ一世のちきりはかり也。
おやは子をおもひ、子はをやをおもふといへとも、たゝ
夢まほろしのあいたの事なり。さらに、のちの

世に二たひ見ゆることなし。されは、大持せそん
にちゝのことくたのみをかけたてまつらは、かならずのちの
よをすくい給ふ。おやをもつへき物しゆしやうのため
なり。しかるに、いまけんふつもんほうのけちえんを
するも、たれかちからそや。ひとへに大おんきやうしゆしやか
女らしいの御ひくわんなり。この御をしへにあつからすは、

「6ウ(5ウ)

【欠】

いりてしゆしやうにかはりて、くをうけん事けつ
ちやうなりとのたまふなり。されは、けんせの御りや
くもいとかなしくそおほゆる。にしさかもとにく
はんおんるんといふ所においたる女あり。五すんはかり
なるちさうをもとめて、をこけといふ物にいれたて
まつりて、くう物のさはまいらせて、としをへて
けり。此女田を二たんもちたりけるを、としころ子
成けるおとこにあつらへてつくらせけるに、いかなる
ことか有けん。六月までつくらさりければ、子をうら
みて、とし比もちまいらせたるちさうにむかひて、

「7オ(7オ)

あはれ人にてをはしまさむには、この田はつくりて
たひてましとてねたりける夜の夢に、なんちか
田のつくられざる事をかなしむあいた、我つくり

てあたへんとのたまいて、わかやかなるそうのきたりたま
へりとみて、夜のあけかたに夢さめければ、道を
とをるものゝこゑにて、昨日までつくりされざりし田を

夜のまには何物のつくりたるらんといふをきゝて、
夢におもひ合て、我田のもとにゆきてみれば、此田

みなうへられたり。ふしきにおもひて、もしちさう
の御はからいにてもやあるらむといそきかへりてみれば、

御あしてにつちうちつきておはしましけり。
又二てうしゆしやかへんにかみすきのありけるか、
そのあたりのものとも、れいせん河原のゑそて

らのちさうかうをおこなひけるに、かみすきさして心さし
はなかりけれとも、なくさみかてらにましわりて

一年に三とつゝ此かうをつとめけり。あるとし、この
かみすきやまい大事にて、いのちおわりおにともに

とらへられて、ゑんまわうくうにゆきぬ。すてにつ
みのきやうちうをたゝさるゝ所に、わかやかなるそう

一人きたり給ひてあなかしこにこいうけて、しや」8オ(8オ)
はへかへるへきみちを、ねん比にをしへられけり。

あまりにうれしくて、いかなる人にておはしまし
けるそととひければ、我はれいせんかはらのつしに

あり、一年に一と我をくやうし給ひしなりとて、うせ

給ひぬ。かみすきよみかへりて、なみたをなかし
此ことをかたりて、いよゝこのちさうをきゑしたて

まつりけり。又ひんかし山に有ける女も、とし久しく

ちさうをねんしたてまつりしゆへに、しゝたるおや
をもちわつらひけるを、あんきやそうにけんし

たまひて、かのしにんを山へをくり、けうやうし給ひ

けり。山をくりのちさうとて、六はらにまします也。
いはんやかかれてのちのりしやうのちのよの御た

すけおもひやりたまひて、いつれの人もみなちさう
ほさつをたのみたてまつるへし。されは、三井てら

のないくう、ちこうはゑん天にちうひやうをうけて、なう
らんする事せんことをしらす。しかるに、おんやうし

せいめいをよひていのらせけれ共、しるしなし。
せいめいかいはく、ちこうはちやうこうかきりある人

なれば、いかにいのりたてまつるとも、しるしあるへからず。
たゝし、御てしの中に、ししやうのちうおんを」9オ(9オ)

しり給ひて、かの御いのちにかはり給ふへき人あらは、
まつりかへんといふ。ちこうはやまひのしのひかた

さに心なき事なれば、わかいのちにかはれとは
いはされとも、てしともの中を見まはせとも、我かはらん

といふ物なし。こゝにせうくうあざりといふてしして
はたしやうのちきりあさからす。されは、こうはう大しは

しは三世のちきり、おやは一世のちきりむつひと仰られ
しなり。せいめいかいふことく、ししやうのいのちにかは

りて、われかのやまひをうけて、つゝにめいとにをも
むくへし。いそきまへりかへよといふをきゝて、ち

「9ウ(9ウ)

こうなみたをなかにしてはく、わかいのちにかはるへき心さしはうれしけれとも、てし

をころしてさきたてん事は、しゆんきには
つれぬへし。たゝまつりかゆへからすといひ

けれとも、せうくういひつることはなれば、ふつと

おもひきりたりけるを、はゝのありけるかきゝて
八十にあまりたる母をふりすてゝさきたてん

こといかにとせいしければ、せうくういかはく、

るてん三かい中、おんあいふのうたんきおんにう

むいしんちつほうおんしやといふようもんを 「10オ(10オ)

ひけり。此心は三かいのうちになるてんすれば、をん

ないたゆる事なし。をんをすてゝむゐに

いる物しんしつのおんをほうする物なりと仏

もとき給へる也。されは、おやのをんは三かいの

うちをはなれざるをんあなり。ししやうのをん

は三かいをはなれてむゐにるしんしつの

おんなり。われすてにししやうのめいにかはりなは、

此くりきによりて、母もかならずむゐのみやこに

入給へし。心やすくおもひ給へしといひて、たち

まちにししやうのいのちにかはり、このこうひやう

「10ウ(10ウ)

をうけ、五たひやすからすなうらんす。せうくう

やまひあまりにしのひかたければ、ほん

そのゑさうのふとうにむかいたてまつりて、

われししやうのいのちにかはりて、このこうひやう

をうけたり。ねかはくは、みやうわうりんしゆしや

うねんにして、はやくころし給へといひて、ら

いはいしければ、ゑさうのふとうの御まなこ

より、くれなゐのなみたをなしたまひて、

なんちはししやうの命にかはる、われは

なんちか身にかはるとおほせられければ

「11オ(11オ)

せうくうかやまい、たちまちなをりければ、

ししやうもてしのちたすかりけり。されは、

十はうの三世のしよふつはとうたいふんちんにて

わたらせ給へは、いつれの御ひくわんもみなかくの

ことし。されは、いつれのほとけにてもましませ、

たのみたてまつりてほとけに成たまふへし。

又もろくのきやうろんしんこんのくとくを

かたはしつゝ申へし。むかしくはらはもんといふ

人あり。一日に千のいき物をころす。としつもり

ぬれば、ころす所の物かすをしらす。こんしやうの

「11ウ(11ウ)

【欠】

くやうすへし。ちかいはかきをきらふへからす。

大こくに玉をふくむとりあり。鳥はたから

ともしらされ共、たまはたから也。されは、そうははかい

なれとも、くやうのくとくはたからとなるなり。こゝを

もつて、羅十三藏はちはにまんゑのことし。

ほうはれんげのことしとのたまへり。はちは

ころものことくに身にあまりぬれとも、ほうは

れんげの○ことし。つちによこれさるか又こうほう大しは、くどくは大地の

ことし。おのれかために、しよ人にほととせとの給へり。

かりそめにもしゆつけのたいをえたらむ物をあ「12才(12才)

しくいふへからず。ゆいなといつし物おろかにして、そう

をあなつりしかは、九十一こうむしにむまれてくを

うく。又ある人わかゝりし時、たはふれにらうそう

をわろくいひしかは、五百しやういぬにむまれき。されは、

いかにもあれ、ほうしをくやうしてわうしやう

こくらくをいのり給ふへき物なり。

第三に、かいをたもちてほとけになるへしと申

事は女らしいのきんかいに入ぬれば、八万四千のあく

こうほんなのいくさせは、せめきたるといへとも

まつたかおかさるゝ事なし。梵網経にはかいを「12ウ(12ウ)

たとて申成実論にはかいをたまたさる物は、もろく

のせんこんをしやうしゆせずとしへたり。又ちと

ろんには、もし人大せんこんをもとめむと思はゝ、

まさにかいをたもつへしといふ。十ふんりつには、

かいをたもつ人をは二十五のせんしんあねう

すといへり。このゆへに、よくたもつを十せんといひ、あしくやふるを十あくと申なり。かいのさま

ひろし。ほさつかいよりしやみかいにいたるまで、

八万のりつき三千のみきなととて、さまく「13才(13才)

おほけれとも、ほとけめうかい大わうのために、

十かいををしへたいるちやうしやかためには、五

かいをさつけ給ふ。このゆへに、まつ五かいの有さま

を申へし。五かいとは、せつしやうちうたうしやめん

おんしゆまうこ此五を申なり。一には、ふせつしやう

と申には、ものゝいのちをたゝぬ事なり。せつのめん

せつのえんせつのこうといふは、みつからころすの

みにあらず。人のころすにもとなはず、人に

をしへてもころさせす。されは、ちかいのひく

さとにいてゝこつしきするに、ある玉つくりの「13ウ(13ウ)

もとへゆきぬ。かの玉つくりいゑのうちに入たるひまに、

うといふとりきたつて玉をのみぬ。たまつ

くりきたりて、こゝに有けるたまうせたり。

こつしきのしやもんのぬすめるそとて、とら

へてうちせめけれとも、せつしやうかいをやふら

しとて、とりののみたるとはいはず、うちせめ

らるゝに、このかなつちぬけてそはなるとりに

あたりて、すなはちしにけり。しはらくあり

て、しやもんのいはく、此鳥はいきかへるましき

かとゝへは、しにはてたるといひける時、さらは、この

とりのはらをあけてみよ、たまあるへしといふ。

そのときたまつくり鳥のはらをあけてみ

ければ玉ありけり。玉つくりこのそうに

「14才(14才)

むかひて、なにとてやかてこのとりのみたる

よしをはのたまはて、ゆへなくせめられ給ふそといひければ、そのいはく、我せつしやうかいをたもつゆへに、いはざるなりといひければ、

その時たまつくり、此そをらいはひしてたつとみけり。この事天たいにとき給へり。む

かし、こく王のまし／＼けるか、きやうこうたつ」14ウ(14ウ)

とき、らかんをきえせんかために、むかへ給

ところに、らかんのきたりたまへるよしをそうしける時、うつごにきるへきところのありけるを、けうにいりてたゝきれとのたまひけるを、

らかむのことゝ心得てくわんにんすなはちらかんのくひをきりつ。こく王こうちはて給て

らかむこなたへよひたてまつれとおほせられけるとき、はやくきれとのたまひつる程に

きりぬと申。こく王このことをかなしみ

あさましくおそろしく覺して、ほとけ

の御まへゝまいりてさんけしたまへは、ほとけ

のたまはく、むかしこく王はかへるにて、田の中にまし／＼ける時、らかんのうふにて田を

つくる程にすぎといふ物もちて、心ならずかへるのくひをうちきりけり。のうふくい

かなしめともかひなくしてやみぬ。されは、いまそのこうをつくさんために、心ならずころ

さるゝなりとのたまへり。あやまちさへかくの

「15オ(15オ)

ことし。いはんや心をおこしてころさんむくひにおいてをや。むししやうしより

しよふつのりやくにもれて、六しゆにりんゑして、かなしむは物のいのちをころして、せつしやうかいをたもたさりしゆへなりとそ、

ほとけはときたまへる。かへす／＼物のいのちをころすへからず。二にふちうたうと申は、草の

一すちもはりの一ほんもぬしにしらせずしてとるへからず。いはんや、その外の物をや。むかし

けうほんはたいてすみに、みちのほとりにおちたるあわをとりたりしゆへに、五百生の

あいた、うへのすかたとなりにき。されは、仏の」16オ(16オ)

物をぬすみたる物は、しやう／＼せゝてなき物にむまるゝなり。くろかねははりにてはて、人は

ぬすみにてはつるなり。こんせうこせあさましき事なり。されは、かしこき人は人の

あたふる物をさへ、ことによりてとらず。ことにぬしのおしむ物ゆめ／＼とるへからず。又六そく

のぬすみといふ事あり。一にはよろつの物をみてほしと思ふ。二にはこゑをきく物、人のかたり

つたへたる物をほしとおもふ。三にはものゝかをかきてほしとおもふ。四にはしたに物のあしわい」16ウ(16ウ)

【欠】

はそくにてありし時、あんををかして一人の子をまうけて六になるとき、しゆきやうのため

「15ウ(15ウ)

にいてんとしければ、われをはいかになれ
とおもひて行給そといひて、あしにとり

つきてをめきさけひしかは、そのたひほと、
まりき。そのゆへにしゆつりのほうへんなく

して、五百世のあいた六しゆにりんゑして、この
たひこそやうくらかむのくわをえたれ。む

かしの六子、すなはちこのからすなりとそのたま
いける。されは、ゐんよく第一の仏たうのさまた」17才(18才)

けなり。ねはんきやうに、女人地ごくしのうたん
ふつしゆし、けめんほきつ、内心如やしやとのへ

給へり。このころは、女人はちこくのつかる
にて、よくほとけのたねをたつ。かたちはほきつ

にたりといへとも、心のうちはおにのことしとき
給へり。まことにさるにや。あゆく大王のきさきは、

まゝ子のくなら太子をおもひかけ給ひたりける
を、きゝたまはさりければ、りやうのまなこをく

しりたまひけり。しかのみならず、とし比の
おつとをまゝおとこころさする女かんかほうてうに

かすをしらす。又ちくしやうにとつく物もあり。これ
みなゐんよくのいたすところなり。よくくつし

み給へし。しかれとも、さいけの物には一人
をはゆるし給へり。くわいにんのあひた、月水

をはいましめられたり。なん女のちきりよし
とてもとてもなにのゑきかあるへき。すみや

「17ウ(18ウ)」

かにゐんよくをはなれて、むしやうほたいの心
をおこして、仏たうをねかひ給ふへき也。四に、

ふおんしゆと申は、さけをのむましき事なり。
天ちくにちやうしやあり。ひとつのくらのうちにさけ

をつくれり。つほおほきにしてすめる事いつみの
ことし。ちやうしやの女くらに入て、さけのかめを

みるに、わかきをんなのかたちよきあり。いそき婦
てちやうしやにむかひて、なんちをたのみてかいらう

とうけつちきりふかし。うらみなかりつるに、かめ
のうちに女ををきて、われにみせつるはとうらみ

ければ、ちやうしやふしきにおもひて、いそき行
みれば、おとなしやかなるおとこ有ければ、ちやうしや

かへりてめにいはく、われをすかしやりてま
おとこころさせんとするにこそとて、とし比の」18ウ(19ウ)

めをうらみてりへつしけるを、一人のらかん
このことをさとて、さけのかめをみれば、

おとこも女もなし。されは、明暮さけをのみ、
のむほとにゑいのあまりにほんしやうを

うしない、わかかけのさけにうつりたるとは
しらすして、かやうにほれたるうらみことを

いひけるあいた、らかむ此さかめをおとりいたし
て、うちわりてちやうしやふうふにみせられたる

時、ふたりかうらみ事やみけり。又かせうふつの時
一人のうはそくかさけにゑいてほんしやう

「19才(20才)」

をうしなふゆへに、人のめをおかしけつくには、とりをぬすみころしつ。ぬしはらちてかこち

ければ、さなきよしをろんしけり。かやうにさけはほんしやうをうしなはする物なり。されは、さけは五かいをやふる物なるかゆへに、仏ひゆきやうにとき給へり。ふつせつくい三、ごうしあくきやうゆいしゆいこんほんふおんへいあくたう

この心は、身とくちと心とを三ごうよりおこるつみとかは、たゞさけをもつてこんほんとす。かるかゆへにのますしてあくたうをとちよときたまふ。〔19ウ(20ウ)又梵網経には、さけをとりて人にあたへん物は五百世の間でなき物にむまるゝとのへ給へり。いはんやみつからのまんにおいてをや。よくくつゝしみ仏になりたまふへし。五には、ふまうこかいと申てそら事をすへからさる也。くちのとかは身をはみ、したのつるきはいのちをきるといふは、そらことをいましめたるなり。されは、ちこくにしていかにむかいてこくそつのいはく、まうこの火は大かいかをもやきつへし。いはんや、まうこの人をやかむことには、草ふかきかれのにひをつけたらんことし。ちこくのたきゝはまうこなり。〕

〔20オ(21オ)〕

されは、まうこのつみにをちたる物とをきよの中はかすをしらす。ちかくせうこをあらはせるは、むらさきしきふ、そらことをもつてけんしの物かたりをつくりしゆへに、ちこくにをちてくけんをうく。

はやくけんしをやきすて、一日きやうをかきとふらふへしと人の夢に見えけるとて、うたよみとものあつまりてとふらいし也。たとへはかり人のしかをもとめうしなひて、こゝをしかやとをりつるといはんに、かれをころさしかたためにしりなからしらすといはんをは、まうこなれとも仏

〔20ウ(21ウ)〕

もゆるし給ふへし。をよそこれにあひにたらん事はくるしからず。此外のまうこはけしほとまうこ成とも、しゆみせんほとのくをうくへし。されは、ゑしんそうつはとしのはしめにならす御門のきやうこうを見たまひけるを、御いもうとのあんやうのあまと申人のあやしみて、君はむこくの道心ある人なり、何のゆへにとしことにおほやけの行幸をは見給そとの給ければ、むかしの十かいのちからによりて、いま十せんのからゐにむまれたまひたる事のなつかしければ、みたてまつるなり。されは、大臣くきやうよりはし

〔21オ(22オ)〕

めていやしきからかさもちにいたるまで、前世のかりきによりて上下のありさまをみて、くわおんくゝのるてんをくわんするなりとそのたまひける。こんせこせのめてたき事は、たゞ五かいをたもつに過たることなし。たとへは、もろくゝのあくねんほんなうは行しやのためにかたき也。かのかたきをうたんとおもはゝ、せんしんのせいをそろへて、一あしもしりそくことな

かれ。そのときあくねんのまうせいはおとされてにけ
かくれぬ。しかりといへとも、やゝもすれば、すきをみてほん
なうのやからむほんをおこす。おこすといへともせんしんの

「21ウ(22ウ)」

はかりことかしこければ、つゐにまうねんのかたき

ほろひうせて、むゐのみやこのあるしとなりて

なかくたのしみにほこりて、二たひしやうしを

うくる事なし。いかにもく女らいのきんかいをた

もちて、後の世をねかふへし。一しやうはひとましろき

のほとなり。返々いるかせにおもふへからず。かやうの事

をふかくしんするをちしやと申なり。

第四に、もろくのきやうこうをつみて仏になるへしと

申は、しよ仏のみな六はらみつをきやうして、しやう

かくなり給へり。六はらみつと申は、ひとつには、たんはら

「22オ(23オ)」

みつふせの事なり。二には、しらはらみつかいたもつ

事也。三には、せんたいはらみつ物をこらへてあたかた

きとかをもおもひなをして、人のいたむへきことを

わかみにおもひしるへき也。四には、ひりやはらみつ

しやうしんをかたくする也。五にはせんはらみつ心を

しつかにもちて仏たうをもとむへきなり。六には、はん

にやはらみつちゑをもつて、まよひのしゆしやうを

すゝめて、こくらくへみちひくへし。この六をあは

せて六度まんきやうを申也。されは、しやうしやりせん

にんはもとゝりに鳥のすをくいて子をうむにかいこの

すたつまてはたらかす。しつたたいしはたん

とくせんにいり、かせうそんしやはけいそく山にこも

りてそおこなひ給ひける。しかのみならず、おほみねか

つら木をとをり、たうをたてほとけをつくり、きやう

をよみ、はなをつみ、水にむすふ人みなふつたうなる

へきおこなひ也。されは、かもふにんはあゆむあしをした

ことにれんけのひらける也。むかしほとけにはなを

たてまつりしゆへなり。むかしたうのくつれたる

所につちをぬりてつくろいたりし人、九十一こうあく

たうをまぬかれて、きやひらちやうしやの子にむ」23オ(24オ)

まれきほとけのはけたりしも、はくををし

たりしゆへに、みらいにかならずほとけに成てくわう

みやう女らいといはるへしとそほとけさつけたまへる。

天ちくしんたんわかてうに心ある人のたれかふつ

たうをしゆきやうせさる事のある。あゆく大王は八万

四千のたうをたて、りやうのふていは二千九百のたうを

たて、きやうきほさつは四十九みんをたてたまへり。いつれ

のかたぎにてもあれ、心のひかかたをつとめおこなひて

ほとけに成給ふへき也。

第五にしやうとにわうしやうせんといふくわんをおこして

「23ウ(24ウ)」

ほとけになるへしと申は、もろくの仏菩薩は

しゆしやうをあはれみ給ひて、をのくくわんをたて

給ふ。その心おほくのきやうにみえたり。尺迦女らい

「22ウ(23ウ)」

は五百の願葉師女らしいは十二のくわん、阿弥陀は四十八くわん、ふけんほさつは十くはんをのくわれらしゆしやうをあはれみてすくはんとおもひ合てちかひ給ふ御心さしなり。されはされは心あらん人はくわんをおこして、ふつたうをしやうしゆしてうゑんのしゆうやうをみちひき、むゑんのさいにんをとふらふへき也。大しやうこんろんには、きやうこうは

「24才(17才)」

うしのくるまのことし。くわんはうしかいのことし。行のうしのくるまあれとも、くわんのうしかいなけれは、庭をめくる事なし。はやくきやうこうをつみて、わうしやうのくわんをおこして浄土にまふて、一さいしゆしやうをみちひき給ふへきなり。こゝをもつて普賢菩薩

はぐわん我りんよくみやうしゆじしんぢよ一切しやしやうけんけんひ仏阿弥陀そくとくわうしやうあんらんこくといへり。此心はねかはくは、我りんしゆの時にのそまは、こくとく一さいのしやう

「24ウ(17ウ)」

【欠】

このくやうをとけしめ給へとかきたり。此しやもんの名のりのもしをみれば、我かなのりのもしとをなしもしなり。これもくわんりきのゆへなり。又むかしみめうのあまといふ物有。しゆくみやうつうをゑて、むかしのことをかたりてい

わく、我むかし一人のまゝ子をにくみてひそかにかしらにはりをさしつ、はゝあやしみて我をうたかひしかは、おほくのちかことをたてたりき。そのちか事ひとつもたかふことなくしやうくせゝにおいたりしなり。いまらかむのくわをえたり

「25才(26才)」

といへとも、かしらよりあしのうらまてはりをとほすやうなるくけんありとそかたりける。何事も一ねんおこす所のくわんはしやうくせゝにはたす也。されは、わうしやうこくらくをねかはんに、阿みた女らしうんにのり、さいはうよりらいかうし給はん事うたかひあるへからず。とをきたとへは申をよはず。ちかくはどう大寺のとくこうといつし人、大般若くやうすへきくわんをはたさずして、にわか命をほりけるか、ゑんまわうくうより返されてくやうをとけてほとなくわうしやうせられけり。其「25ウ(26ウ)時ゑんま王のさつけ給ひしきやうもんあり。はんをやたい一きやうしきやうけつゑんしやすいうちうこつしやうひつたうとくけたつ此心はんには第一のけう也。此きやうをけちえんする物は、こつしやうおもしといへとも、かならずけたつをうるといへり。その比ゑんまわうしゆせられたるきやうもん成とて、あまねくしよにん申あへり。

第六に、こつしやうをさむけして、ほとけ

になるへしと申は、人かいにしやうをうくるたの」26オ(27オ)
しみは、さんけのほうにあひしゆへ也。道しやく
禪師のあんらくしうにきやうをひきての給

はく、人の一日一夜をふるあいたをふあには八おく四

千の思あり。いはんや、ねんくにおこすおもひの

かすむりやうむへんなり。これみな三つのこよう也

といへり。いはんや一廿しやうかいのこようをや。いはんや、しやう

く、せゝのこようをや。この心をはゑいくわん法師か七

たんのしきにくはしくしるせり。心ちくわんおんには、

在家のものはよくほんなうのゐんをまねく。しかり

といへともさんけすれば、あらふるほんなうみな」26ウ(27ウ)

めつしてほたいの花ひらく。さむけすれ

は、大ゑんきやうをみる。さんけすれば、ほう

しよにいたる百ちやうのいしなれ共、舟いかた

につみぬれば、大かいにしつむ事なし。つみは

百ちやうのいしのことし。さむけは舟いかたの

ことし。はやくもろく、のこつしやうをさんけ

して、しやうしのくかいをわたるへきなり。され

は、ふけんほさつはうさうむさうせつりこし

此三つのさんけをおしへ給へり。よくく、心え

しるへし。まつしきさうのさんけといふは、

「27オ(28オ)
むししやうしよりつくりしつみをはちかなしみ

てほつろていきうして、あるひはほんそんにむかい、

あるひはけんしやうにむかゐてさんけするなり。
大きやうにいはいく、もし人つみをつくりてかくせば、

すこしきつみ成といへとも、ことはさむけして
こゝろをさんけせざるは、いたつら事なり。心

のつみはさんしやうをほろほし給ふへし。これを

まことのさんけといふなり。次に、むさうのさんけと

いふは、一切のこつしやうはみなまうさう也。しやうすれ共

そのたいといふ物なし。これをりのさんけと申なり。

「27ウ(28ウ)
たとへは、千年のやみはくらげれとも、さんけの

一すんのしそくをいれぬれば、千ねんのやみははれ

ぬへし。たとへは、こつしやうのたき木は千りに

つみたりといふとも、けしはかりのさんけの火を

つけぬれば、ことくやけうせぬ。たとへはあく

こうのくもきりはあつけれとも、さんけのかせふ

けはあくこうのくもきりみなはれて、ほつしやう

のそらあきらか也。たとへはほんなうの露しもふ

かけれとも、さんけのゑにちいてぬれば、すなはち

きえうせぬ。此心をふけんきやうにときたまへり。

「28オ(29オ)
一切こつしやうかいかいちうもうさうしやうにやくよく

さんけしやたんさしつさうしゆさいによさう

ろゑにちのうせうちよせこおうししんさんけ六しやう

こん。この心をうたによめり。覺樹法師

いのちをもつみをも露にたとへけりきえは

ともにやきえんとすらん 前さい宮大輔

心よりむすひをきける霜なれば思ひとく日に

のこらさりけり。さんけと申は、しやうくせつにつくるつみをはちあくこうほんなうにおちをそるゝをいふなり。ひとつのせうこを申すへし。天ちくにあき人

「28才(29才)」

【欠】

天下みたる天下みたれぬれば、はんみんのなげきなり。たみのなげきすなはちさい

こう也。まつりことのあしきはこんせ後世の

たゞり也。されはきのふんていは六さい物の命をころし給はず。むかし小しやみの有けるか、あり

のひとつ水になかたたるをとりていけたりしに

よりて、こんせうのいのちのひたりきやしや

ちやうしやはひつまりたるいけの水にすめるうほ

をとりにて、大かいはなちけるゆへにちやうしや

のとくをあらはず。されは八まん大ほさつのいはく、

「29才(30才)」

しんくうくわうこうのいこくたいちの御ときお

ほくのせつしやうをつくらせ給ひしかは、そのくん

るいをすくはんかために、すくなき水にすめる

うほをとりにて大かいはなちたまへり。いまの

はうしやうゑのまつりことこれなり。はうしやう

ゑとはいけるをはなつゑとかけり。たとへちい

さきかたちをうけたる物なれ共、命ををし

む事は大人より猶をもし。たとへちく

るいにむまるといへとも、子をおもふ事は人かい

よりもすきたり。返々ものゝいのちをころ

「29ウ(30ウ)」

【欠】

りきしやをわかたへよはすはいのちをたつへしといひけれとも、かううは天下をたもつましきさう有とみて、子にはたゝかうそにつ

かへよ、我はいのちをすつといひをきて、つるき

におちかゝりてうせにけり。されは、心地くわんきやう

には世人為子ざうしよざいたさい三づぢやう

じゆくとき給へり。此心はよの人は子のために

もろくゝのつみをつくりて、三つにおちてなかく

くるしみをうくるそとのへたまへり。又わかつてう

むさしのくにゝむかしひまろといふ物有。おも

はしきめをもちたりけるか、国ぬしの京上しける

ともしてのほるへきにて有けるに、此女を

すてゝのほらん事をかなしみて、きんきのよしを

いひてのほらしとはゝを山の中にくして行て

ころさんとする時、大地にはかにわかれてかのひ

まろおち入けるを、もゝとりとりてひきあくるは

はゝなり。子の大地のそこへおち入事をかなし

みて、我かいのちのうせん事はおそれず、かたき

となれる子を引あげしは、いとわりなくそお

ほゆる。くはしくはひまろかてんにみへたり。 「30ウ(31ウ)」

これほとに心さしのあさからぬおやのためにけう

やうせさらむ人あらむや。しかりといへとも、天人は

たのしみにふけりて、けうやうのこゝろさしなくして

三つのくるしみにせめらるゝ也。されは仏は御母のけうやうのためにたうり□□□のほり、ほうおんきやうをときたまひしなり。こくらくにわうしやうしたるしゆしやうにむかてふ□□んなうのいはく、ちゝはゝけうやうのわうしやうかしちやうふしのわうしやうかたとふなり。されは、ちゝはゝけうやうの心さしをもつ□□こくらくにわうしやうせん」31オ(25オ)事これにてもしるへし。これせつりこしのさんけのたいあるなり。にんめい天王は一年かあいたのつみをさんけせんとて、としのはてにかならず三千仏の御名をきゝてそさいしやうをさんけしたまひける。これを仏名と名つけていまにたえず。むかしいまの人此心をおほくうたによめり。

たいらのかねなり

あら玉のとしもつくればつくりけんつみも残らずきえやしぬらん
みなもとの仲綱
過にしものちもしらるゝ身のうさにみよの仏のなつかしき哉

「31ウ(25ウ)

第七にもろくのせをきやうすへしと申は、しよ仏のみなせをほとこして、しやうかくをなり給へり。これをたんはらみつといふりうしゆほさつはせをきやうする人は月のはじめていつるかことく、しよ人にうやまはるゝとのたまへり。こくしやうさいしをすてん事草木よりもかろくす、もくしゆそくをせする事□□きよりもやすくすへし。

こゝをもつて□□□やうには、こくしやうさいしつもく□□□身にくしゆそくふしやしんみやうとときたま□□。この心はほうのために」32オ(32オ)くにとこめこはい□□およはず、五たひ六こんおよひのちを□をしまされとをしへ給へり。されはしひ大王はとにかはりてみつからのしゝむらをたかにあたへ、さつたわうしはうへたるとらにわか身をほとこし、せつせんとうしはむしやうのものにいのちをかへ、しやりほつそんしやまなこをぬきて、こつけんはら門にとらせし也。これならずせに心さしある人少々申すへし。

あしやせわうほとけをむかへまいらせてせつほうさせたてまつりて、夜に入てほとけの御かへり」32ウ(32ウ)ありければ、あしやせわうくうより、きおんしやしやまた火をともし給ひ□□に、ひん女のせに二文もちたりけるか、これをあふらにかへて、ともしたりけるゆへに、三十一こうをへてほとけになるへ□とて□□とうくわう女らいとそさつたまひし、これを□□□

万とうよりひん女か一とうとは申なり。後□□は申におよはず。こんせにとくをあらはず事共おほきなり。天ちくにゑしあり。きやひらしやうにしやうようをえて行ぬ。さいしたちゐにまつほとによの中を過わひて、ゑしのかへるをたのみておほくの人ものをかひてつかひて月日ををくりけるに、ゑし

「33オ(33オ)

十二年といふにこかねを三十兩えてかへるに、道のほとり
にたうの有けるに仏にはくおさんとて、こかねをすゝむる
ひしりあり。ゑしおもひけるはいゑにもちてかへりてはた□
こんしやうのたからにてこそあらむすれ。ほとけにま
いらせてしやうくせゝのたからになさんと思ひてこのこかね
をほとけにまいらせけり。てをむなしくしていゑに
かへりけるにさいしよろこひて、なにをかもちてかへり
□□□とゝひければ、ありのまゝにかたりけるをきゝて、
このほとたのみまちつるかひもなく、いまははやまとひ

「 33 才 (33 才) 」

物になりぬとかなしみなけくを、おほやけ此事を
きこしめして、心おほきなる物なり。国のつかさし
るへしとてくにかみになし給へり。こんしやうの
りしやうかくのことし。こしやうのうつたへ思ひやり
給ふへし。されは、ほとけの御はたへのこんしき
なる事はゆをわかつて、人にあひせ給ひし

ゆへなり。こゝをもつて、くわうみやうくわうこうは
ゆをわかつてみつかから人のあかをすりたまひしに、
おそろしけなるかつたいの我かあかすりてたへと
いひければ、くわんをやふらしとて、ひそかにあかを

「 34 才 (34 才) 」

すりたまふとて、此事人ないひそとのたまひ
ければ、かつたい又あしゆくふつのあかすりたりと
人になのたまひそ、きさきとてかきけすやうに
うせにけり。されは、あしゆくふつへんけし給ひて

かの心さしの程を心み給し也。ほとけせんせの
くとくをほめ給に、十方のくくとをちりとなして、そ
のくにの草木くわりやくとしり、三千せかいの

水を大かいに入て、その川の水とはしるとも、せの
くどくはたやすくかそへつくすへからすとの給へり。されは、
くい物を人にあたふるは五のどくをあたふるといへり。一には
いのち、二にはいろ、三にはちから、四にはやすらかなる事、
五にはことは也。この五の事は物をくわされは、いつれも
かなはず。かうけんしゆといふ木のみはけしよりも

「 34 才 (34 才) 」

ちいさけれとも、一夜に百ちやうおひのほりて、その
かけに五百りやうのくるまをかくす。せのくどくもかのことし。
すこしきくどくなれ共、かならずこくにておほきなる
くどくとなれり。されは、こくそつさいんにむかいて
なとくどくをせすして、ならくのこきやうへはかへり
たるそといへは、さいにんひんくむふくにして、たから
をほしかりしゆへに、すこしのせんこんをもなさすと

「 35 才 (35 才) 」

いへは、こくそついかれるまなこをみひらきて、はけしき
こゑをあけていはく、いたつらにのへにさきし花一枝
ほとけせしたてまつらん心さし、まつしきによるへ
からす。むなしくたにゝなかるゝ水一むすひ、そうに
くやうしほとこさん事たかなきによるへからす
とそ申ける。はやく一花一水なりとも、ふつほうそう
にせして、ほとけになり給ふへし。

第八に、くわんねんををこして、仏たう惟たう正たう師たうをいのる
と申は、そしせんとくみなくわんによるかゆへにみな
せし也。たとへはしやうくに成たる人のすい

「35ウ(35ウ)

ちやうのうちになしなから、はかりことをはんりの
ほかにめくらし、天下をおさむるかとし。かしこき
人はしほのいほりのうちにゐなから、十万をくの
ほかなるこくらくしやうとのゑほうしやうこんをくわん
して、わうしやうのほんゑをとくる物なり。されは
しやうとしやうせつは、くわんねんのたな心のうちに
ありといへり。あるひはみた女らいのくとくちの○ほう
れんたひにさして、はるかにくわうみやうをはなち給ふ
事をくわんし、あるひは七てうほうしゆのしたに
くわんおんせいしの二ほさつ大ほんわかの御こゑして

「36オ(36オ)

せつほうし給ふ事をくわんし、あるひはしうんにのりて
さいはうにあらはれ給ふ事をくわんし、あるひは六十
万をくわないたこうかしやゆしゆの大しんをくわんし、
あるひはみけんひやくかうの五しゆみのやうなるをくわん
し、あるひはくうてんろうかくのひきやうするをくわんし、
あるひは上ほんれんたいのあかつきのたのしみ
こゑをくわんし、あるひはふかんゑんなうの五こん
五りきのほうもんをさへつるをくわんして、八十
をくこうのさいしやうをのそきて、つゐにあんやう
しやうせつにわうしやうするなり。くわしくはくわん

きやうにとき給へり。これを十六さう

「36ウ(36ウ)

くわんといふ。あるひはわか身の中のしんふにしつさう
をくわんし、あるひはこの身のふしやうなることをく
わんして、みなわうしやうこくらくのゑんとするなり。
しんによしつさうをくわんするといふは、心仏及
衆生の思ひをなして、是三 とくわんする也。
此心はこゝろとほとけとしゆしやう、このみつはしや
へつなしとくわんするなり。
一切しゆしやうしつうふつしやう女らいしやうちうむ

「37オ(37オ)

うへんやくとのへ給へり。この心は、一さいのしゆしやうは
ことくくふつしやうあり。女らいしやうちうにして
へんする事なしといへり。このゆへに心ある人はみな
一しき一かうむひ中たうとくわんして、しんによしつ
さうひとつなりとするなり。ふきやうほさつのふもん
きやうまんとおかみ給ひしも、一さいしゆしやうふつ
しやうをくしたりとくわんし給ひしなり。しやう
ある物はいつれかふつしやうをくせさるへき。われらか
むねのうちに本覚の心法身の妙法の
さして三十七そんかた時もたちさり給ふ事なし。」37ウ(37ウ)

【欠】